

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県病虫害防除所長

平成23年度病虫害発生予報第7号（10月）について

このことについて、病虫害発生予報第7号を発表したので送付します。

予報第7号

ミナミキイロアザミウマの防除を徹底しましょう！

冬春ナスにおいてミナミキイロアザミウマが、平年より多く発生しています。同様に、促成作型の冬春キュウリでも定植直後からの多発生が懸念されます。

本虫が媒介するキュウリ黄化えそ病は、発生すると生育が抑制され減収につながる上、急速に拡大するため注意が必要です。

そのため、防虫ネットによるハウスへの侵入防止策や発生初期からの薬剤防除等の防除対策を、徹底しましょう。



ミナミキイロアザミウマの成虫



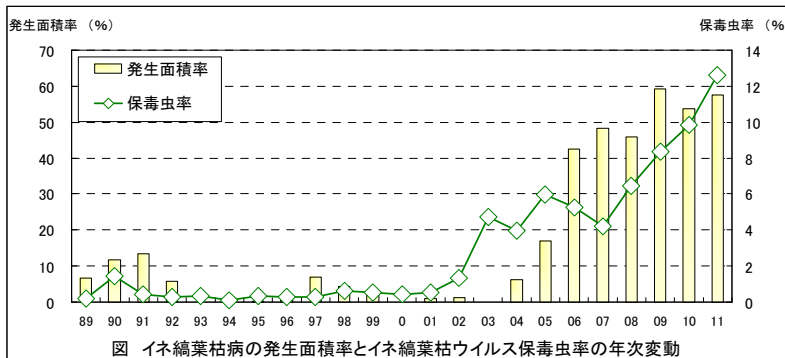
キュウリ黄化えそ病

ヒメトビウンカの越冬場所を減らしましょう！

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率は年々高くなっており、縞葉枯病の発生も年々増えており、本年の発生もやや多い状況でした。

イネ縞葉枯ウイルスは、ヒメトビウンカ保毒幼虫体内で越冬し、翌年の伝染源となります。

ヒメトビウンカは収穫後のイネ株やイネ科雑草等で越冬するので、水稻収穫後は速やかに刈株を鋤き込むと共に、休耕田の耕起及び畦畔の雑草管理を行い、越冬幼虫の密度を下げましょう。



イネ縞葉枯病とヒメトビウンカ中齢幼虫

10月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

| 作物名 | 病害虫名 | 発生量 (現況) | 発生量 (10月の発生予報) | |
|-------|---------------------|--------------|-------------------|------------|
| | | 平年比 | 平年比 | 前年比 |
| 大豆 | ハスモンヨトウ 吸蜜性カメムシ類 | やや少 並 | やや少 並 | やや少 やや多 |
| かんきつ | ミカンハダニ | 並 | 並 | 並 |
| かき | 炭疽病 | やや多 | やや多 | やや多 |
| 果樹共通 | カメムシ類 | やや少 (前年比) | 並 (平成20年比) | 並 |
| 冬春イチゴ | 炭疽病 ハダニ類 | やや少 少 | やや少 やや少 | 並 並 |
| 冬春ナス | ミナミキイロアザミウマ | 多 | 多 | 多 |
| 野菜共通 | ハスモンヨトウ オオタバコガ | やや少 やや少 | やや少 やや少 | やや少 並 |

注：カメムシ類（果樹共通）の平年比について、現況は、年次変動が大きいため前年比としている。
また、10月の発生予報は、発生状況が類似している平成20年比としている。

<予想される向こう1か月の天候（平成23年9月24日～10月23日）>

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量と日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週目は高く、2週目は低く、3週目以降は平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

| 要素 | 低い（少ない） | 平年並 | 高い（多い） |
|------|---------|-----|--------|
| 気温 | 20 | 40 | 40 |
| 降水量 | 30 | 40 | 30 |
| 日照時間 | 30 | 40 | 30 |

（福岡管区气象台 平成23年9月23日発表抜粋）

作物別発生予報

注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。

注②：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示します。

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

25株当たり幼虫数 14.3頭（平年 41.6頭、前年 20.8頭）

幼虫発生ほ場率 71.4%（平年 82.0%、前年 81.3%）

イ 9月1半旬～5半旬のフェロモントラップにおける合計誘殺虫数は、やや少なかった（-）。

筑紫野市 1,372頭（平年 2,542頭、前年 2,747頭）

柳川市 4,879頭（前々年 2,425頭、前年 5,409頭）

行橋市 466頭（前々年 1,205頭、前年 251頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

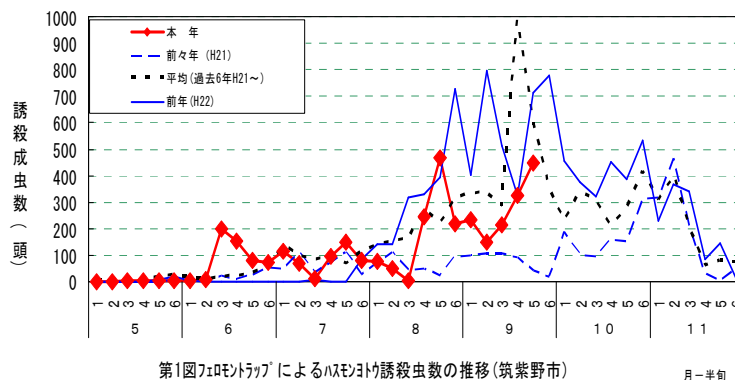
ア 誘殺虫数は地域によって発生に差があるため、必ずほ場での発生状況を確認し、孵化幼虫が群生した白変葉が発生し加害が続いている場合は、早急に防除を行う。

イ 卵塊や分散前の若齢幼虫が群生している白変葉は、見つけしだい除去する。

ウ 薬剤散布は、効果が高い若齢幼虫期に実施する。

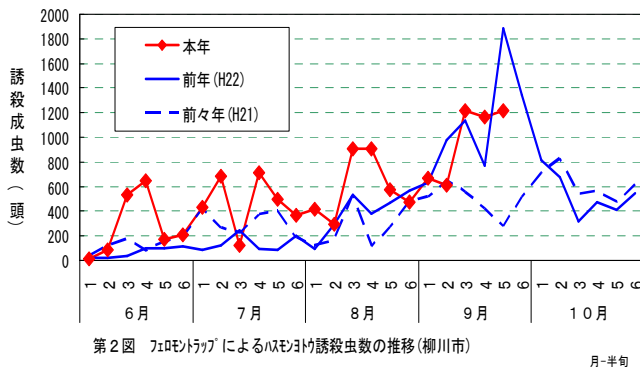
中老年幼虫が混発している場合は、これらの幼虫にも効果の高い薬剤で防除を行う。

エ 防除に当たっては、農薬使用基準を守るとともに、周辺への飛散（ドリフト）防止の徹底を図る。



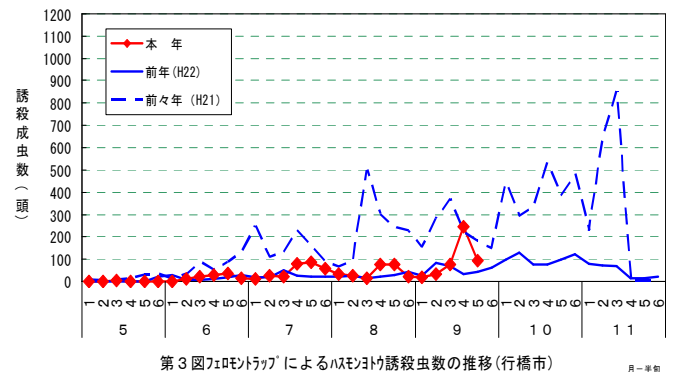
第1図フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺成虫数の推移(筑紫野市)

月-半旬



第2図 フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺成虫数の推移(柳川市)

月-半旬



第3図フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺成虫数の推移(行橋市)

月-半旬

2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並みであった（±）。

ミナミアオカメムシ

25株当たり成虫数 0.2頭（平年 1.0頭、前年 0.1頭）

発生ほ場率 15.4%（平年 16.4%、前年 6.3%）

主要3種吸実性カメムシ類（アオカメムシ、イモジカメムシ、ホリカメムシ）

25株当たり成幼虫数 1.2頭（平年 1.3頭、前年 0.1頭）

発生ほ場率 35.7%（平年 30.8%、前年 6.3%）

イ 県下5か所の予察灯における9月1半旬～5半旬のミナミアオカメムシの合計誘殺数は、14頭（過去8か年平均92頭、前年28頭）で、過去8か年平均及び前年より少なかった（-）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

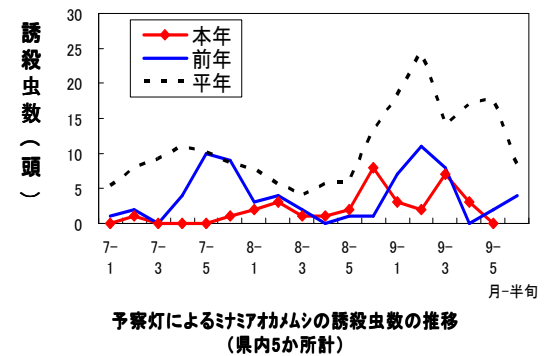
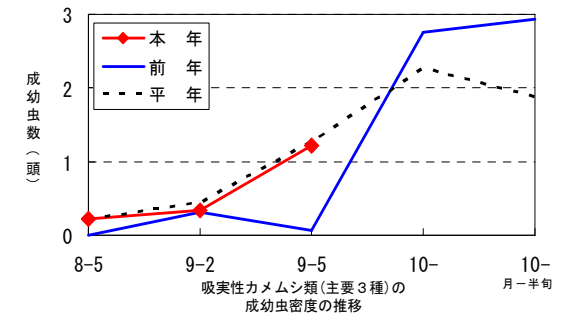
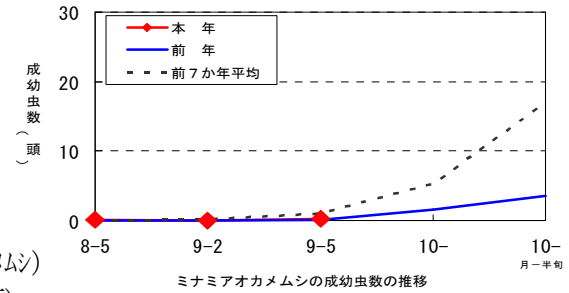
ア 吸実性カメムシ類の加害は収穫期まで続くので、必ずほ場での発生状況の把握に努め、発生が多い場合は防除を行う。

イ 薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるように丁寧に散布する。

なお、カメムシ類は広範囲に移動するので、広域一斉防除の効果が高い。

ウ 水稻収穫後、ミナミアオカメムシが飛来する場合がありますので、大豆ほ場での発生状況に十分注意する。

エ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルオフェン剤の防除効果が低いので、効果の高い薬剤を使用する。



【果樹：かんきつ】

1 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生葉率 7.7%（平年 5.1%、前年 7.7%）

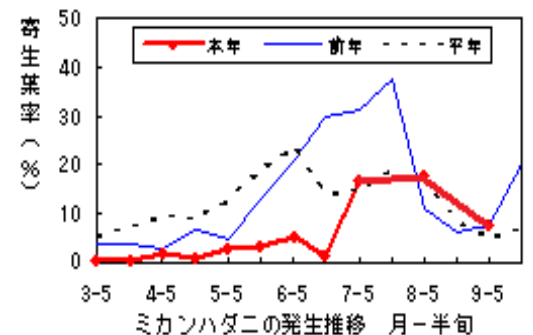
発生ほ場率 63.6%（平年 39.1%、前年 45.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。

発病果率 1.4% (平年 1.0%、前年 0.3%)

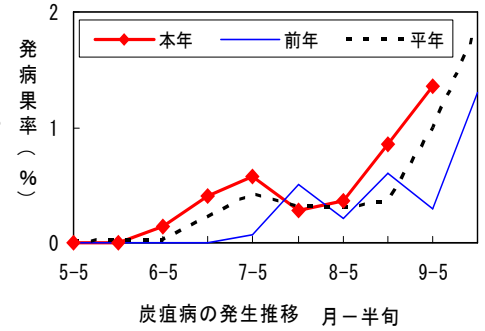
発生ほ場率 42.9% (平年 38.6%、前年 14.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源である罹病枝及び罹病果は除去・処分する。

イ 台風等の強風雨が予想される場合や、罹病枝の多い園では、薬剤防除を徹底する。



【果樹：共通】

1 カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)

(1) 予報の内容

発生量：前年・平成20年並

<参考:チャバネアオカメムシの発生状況>

| | 本年 | 前年 | 平成20年<類似年> |
|-------------------------|------|-----|------------|
| 越冬数 (頭/m ²) | 0.7 | 2.0 | 0.5 |
| ヒノキ球果着生量 | 中 | やや少 | やや多 |
| 発生型 | (後期) | 後期 | 後期 |

(2) 予報の根拠

ア 県下6か所の予察灯における9月1~4半旬の主要3種カメムシの合計誘殺数は1,146頭で前年よりやや少なく、平成20年より少なかった(前年1,712頭、平成20年3,553頭)(-)。

イ 県下25か所における9月5半旬のヒノキ球果のビーティング調査では、主要3種(チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ)の寄生虫数は平均12.1頭/か所で、前年より多く、平成20年並であった(前年2.5頭、平成20年13.6頭)(±)。

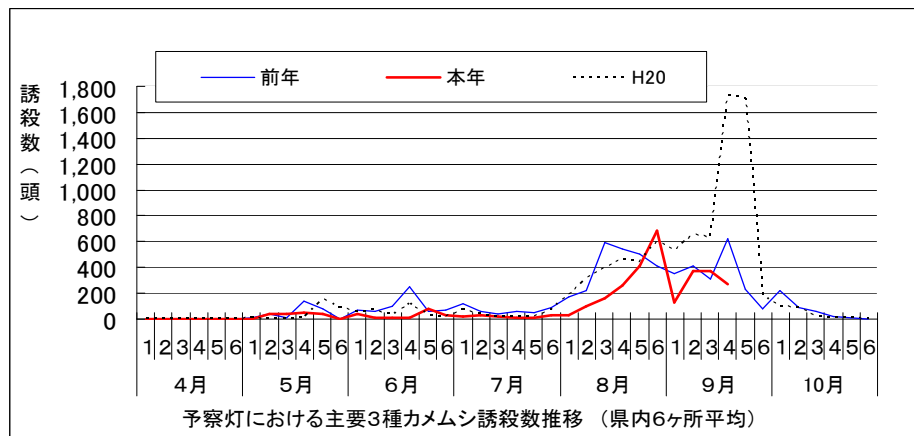
ウ 県下25か所における9月5半旬のヒノキ球果の口針鞘数調査の結果は、平均23.3本/球果で前年よりやや多く、平成20年並であった(前年18.7本、平成20年25.0本)(±)。

エ カキ被害果の発生量は前年、平成20年並であった(±)。

被害果率 1.5% (前年 0.6%、平成20年 1.2%)

発生ほ場率 46.2% (前年 46.2%、平成20年 57.1%)

オ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(±)。



(3) 防除上の注意

ア ヒノキ1球果当たりの口針鞘数は、筑後管内でヒノキからの離脱目安とされる25本を超えている。本所・行橋管内は20本程度であるが、地域によっては25本を超えている所があるので、果樹園への飛来確認に努める。

イ カメムシ類は通常は夜行性であるが、夜温が低下する10月以降は、昼間も移動し果実を吸汁加害するので、昼間でも果樹園への飛来に注意する。

ウ 最新の果樹カメムシ類の発生状況については、病害虫防除所ホームページを参照する。

【果樹：その他の病害虫】

| 作物名 病害虫名 | 発生量 (現況) | 発生量 (10月の発生予報) | | 防除上注意すべき事項等 |
|----------------|-------------|-------------------|-----|----------------------|
| | 平年比 | 平年比 | 前年比 | |
| カキ フジコカガラムシ | やや少 | やや少 | やや多 | ・発生が多い園では、薬剤防除を徹底する。 |

【野菜：イチゴ】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は過去7か年平均よりやや少なかった(－)。

発病株率 0.0% (過去7か年平均 0.6%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(±)。

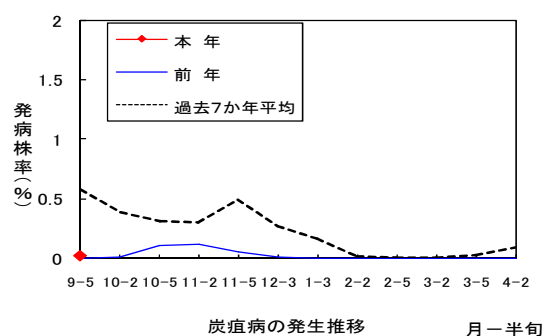
(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は、残さを残さずに周囲の土ごと掘り取り、ほ場外で処分する。

イ ビニル被覆時期までは感染する可能性があるため、定期的に防除を行う。

ウ 하우스内の排水を図り、多湿にならないようにする。

エ 無病親株の確保のため、ビニル被覆期以降に発生する秋期ランナーより採苗する。



2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は過去7か年平均より少なかった(－)。

寄生株率 1.4% (過去7か年平均 4.6%、前年 0.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(±)。

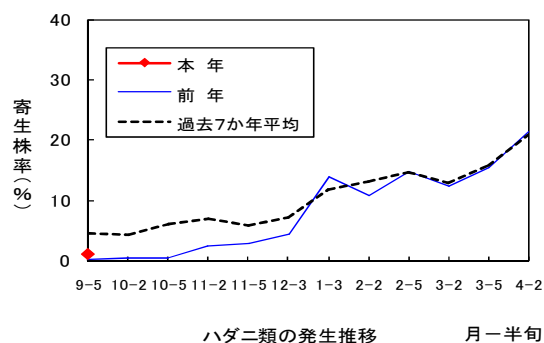
(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発後は防除が困難になるので、初期防除を徹底する。

イ 防除は、摘葉後に行うと効果的である。

ウ ハウス内と周辺ほ場の除草を徹底する。また、摘葉した葉や除去した雑草はハウス内に放置せず、ビニル袋に入れ密封し処分する。

エ ビニル被覆後に天敵を利用する場合は、天敵類への影響が大きい有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。



【野菜：ナス】

1 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

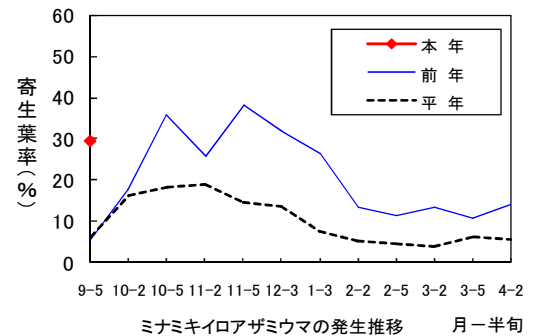
寄生葉率 29.4% (平年 6.3%、前年 5.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内外の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。

イ 防虫ネット(0.4mm目合い以下)を展張し、定期的な薬剤散布を実施する。



【野菜：共通】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップにおける9月1～5半旬の合計誘殺虫数はやや少なかった(一)。

筑紫野市 1,372頭 (過去6か年平均 2,542頭、前年 2,747頭)

柳川市 4,879頭 (前年 5,409頭)

行橋市 466頭 (前年 251頭)

※グラフに関しては【普通作：大豆】のハスモンヨトウの項を参照

イ 9月5半旬調査の結果、キャベツでの発生量は平年より少なかった(一)。

寄生株率 0.5% (平年 5.4%、前年 15.3%)

ウ 9月5半旬調査の結果、イチゴでの発生量は平年よりやや少なかった(一)。

寄生株率(本ば) 0.3% (平年 2.2%、前年 1.8%)

エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 孵化直後から3齢幼虫期までに、薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫が群生しているかすり状の葉は、見つけしだい除去する。

エ 施設栽培では成虫の飛び込み防止のため、4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。

オ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。

2 オオタバコガ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 県下5か所のフェロモントラップにおける9月1～5半旬の平均誘殺虫数の合計は、18.5頭で、平年より少なかった(平年 57.7頭、前年 28.0頭)(一)。

イ 9月5半旬調査の結果、キャベツでの発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 4.0% (平年 4.2%、前年 19.7%)

ウ 9月5半旬調査の結果、イチゴでの発生量は平年並であった(±)。

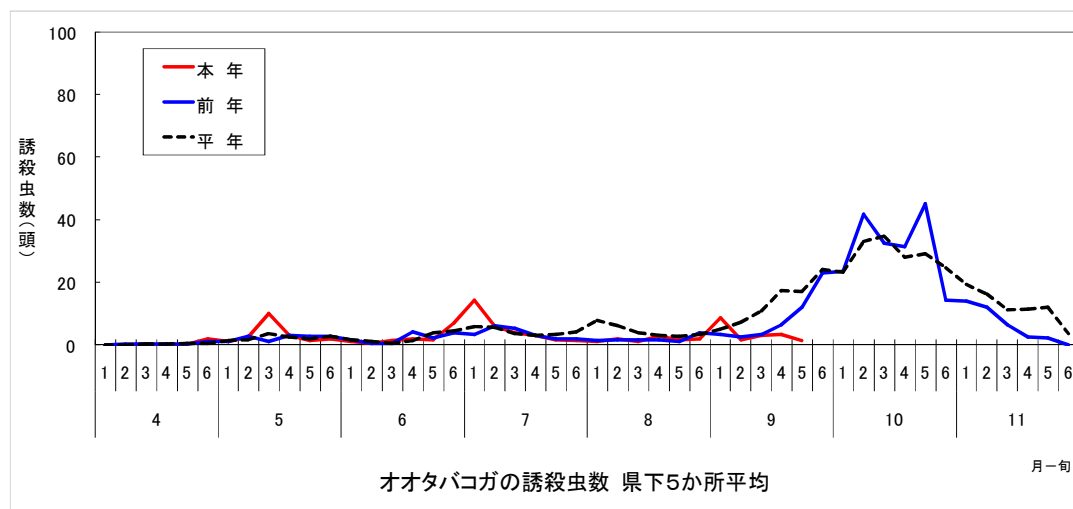
寄生株率(本ば) 0% (平年 0.9%、前年 0.9%)

エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 中齢以降の幼虫は未熟果や結球部位に食入するため、薬剤の効果が著しく低下するので、早期発見に努め、孵化直後の幼虫を狙って防除を行う。

- イ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため、4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：その他の病害虫】

| 作物名 病害虫名 | 発生量 (現況) | 発生量 (10月の発生予報) | | 防除上注意すべき事項等 |
|----------------------------|-------------|-------------------|-------------|---|
| | 平年比 | 平年比 | 前年比 | |
| 冬春イチゴ うどんこ病 | 並 | 並 | 並 | ・ビニル被覆前後は発生が多くなるので、発生状況には十分注意し、防除を徹底する。 |
| 冬春ナス うどんこ病 コナジラミ類 | 並 並 | 並 並 | 並 並 | ・整枝、剪定を行い、通風を良くする。 ・防虫ネット(0.4mm目合い以下)を展張し、定期的な薬剤散布を実施する。 |
| 冬キャベツ 菌核病 黒腐病 コナガ | 並 並 並 | 並 並 並 | 並 並 並 | ・発生株は菌核を作らないうちに早く除去焼却する。 ・排水の悪い土地は、株間をあけて植えつけ、風通しを良くする。 ・多発すると防除が困難となるので結球期前の防除を徹底する。 |
| アスパラガス 斑点性病害 アザミウマ類 | 並 並 | 並 並 | やや多 並 | ・散布ムラができないように、丁寧に薬剤を散布する。 ・ほ場内外の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。 |

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などの※ラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>
電子メール byougaichuboujyo@pref.fukuoka.lg.jp